

三年生でゼミに参加して以来、佐野眞一、柳田国男、宮本常一らにはまってきた土田さんが卒論で選んだのが、ご覧のように、集団就職という今ではあまり顧みられることのないテーマであった。

彼は一貫して、社会の中で華やかな舞台からはずれたところにいた人々の存在に強い関心を抱いてきた。そして、中学を卒業して都会に出て、その大部分は社会の下積みとなって一生を送った人々の生きた姿への強い思いから、論文作成は始まった。

しかし「思い」は普遍的に通用するものではない。「思い」を共有しない人にも納得してもらえる論文であるためには、論証・実証を用いて緻密に組み立てられていなければならない。彼はそのために必要な材料を、時には Web で探し、時には山形の県立図書館で古い資料を調べ、集めてきた。統計的な処理が必要だと思われるところでは、一年生以来久しぶりに利用する Excel でグラフを作成した。そのような根気と集中力を要する作業をよくやったと思う。

指導教員である私がしたことは、草稿を読んでは疑問符をつけるという作業だけである。恥ずかしながら、主要な参考文献である加瀬和俊『集団就職の時代』（1997）も、荻谷剛彦他『学校・職安と労働市場』（2000）も、まだ読んでいない。読み手として疑義をただしたいところに印をつけて指摘すれば、次の時には、それに応えるために当方の期待以上に調べ直してくるという書き直しの過程は、今から思い返すととても楽しいものであった。一例を挙げれば、当時の山形県内には繊維関係を中心に企業があるので、県内就職で企業に就職した者もいるのではないかと（県内就職を聞いたことがないという元中学校教師の言葉は受け入れがたい）、と疑問を呈したら、出てきた原稿に「県内就職をめぐって」の一節が追加されていたということがあった。私をもっと疑問符をつけていれば、もっとレベルの高い論文になっていたのではないかという気がする。

東北地方の非都市出身者で、しかも比較的貧困な家庭に生まれた者たちが、中学卒業と同時に、大都市出身者が就こうとしない職場へと、中学校・職安の手を通して、いともスムーズに送り込まれていく。それが、いつ頃のことであり、どのように行われていったのかを、明らかにした労作である。論証と実証を駆使したかなりレベルの高い論文に仕上がった。彼の「思い」を共有しない人も、統計数字や同時代資料による肉付けによって、当時の集団就職の事実としての地域性や階層性を納得してくれるのではないだろうか。「思い」を共有する人に至っては、文字の向こう側にある情景（感情を呼び起こすという意味でまさしく「情景」）に、心を動かされるのではないだろうか。青森・山形・福島・栃木・埼玉・神奈川と、東京に近づくにつれて中卒者就職先の規模が大きくなるという冷静な数字に、胸が痛くなるなどというのは私だけだろうか。

実は、研究者をめざす彼にとって今後どのような学会や研究会に参加していったらいいのか、指導を尽くす自信が持てなくて、ご教示を仰ぐべく何人かのベテラン研究者に原稿をそのまま送って読んでいただいた。返事をくださった方々は異口同音に優秀であると褒めてくださり、ありがたいことに懇切丁寧なアドバイスをくださった。次の研究成果が大いに期待されるところである。